平成 24 年度版

NEW CROWN

ENGLISH SERIES

Q & A 集

SANSEIDO

＝ も　く　じ ＝

A　全体の方針について ―――――――――――――――――――――――― *6*

Q1：24 年度版 NEW CROWN のコンセプトはどのようなものでしょうか。
Q2：18 年度版からの改訂のポイントは何ですか。
Q3：時間配分はどうなっていますか。
Q4：レッスン構成を大幅に変えた意図は何ですか。
Q5：分量を増やしたのはなぜですか。
Q6：本文の役割は何ですか。
Q7：NEW CROWN は学校教育としての英語教育をどのように考えていますか。
Q8：ことばの教育についてどのように考えていますか。

B　題材について ―――――――――――――――――――――――― *11*

Q1：なぜ NEW CROWN は題材を重視しているのですか。
Q2：題材の選択の方針はどのようなものでしょうか。
Q3：姓名の順序は Tanaka Kumi 式でよいのでしょうか。
Q4：英語の教科書でなぜ英語圏以外の国や地域を扱うのでしょうか。
Q5：なぜ英語の教科書の登場人物にインド人や中国人が出てくるのでしょうか。

C　言語材料について ―――――――――――――――――――――――― *15*

＜文法＞

Q1：24 年度版の文法配列で，18 年度版との主な変更点はどのようなものですか。

Q2：レッスンの GET で，疑問文・否定文など 2 つの項目が配当されているところのねらいはどのようなものでしょうか。

Q3：POINT のキーセンテンスが本文と違うのはなぜですか。

Q4：I'm などの短縮形と，I am などの短縮されない形の出し方の基準はあるのですか。

＜語彙＞

Q1：使われている単語はどのように選定されているのですか。

Q2：Words 欄の単語の書体の違いは何を示していますか。

Q3：NEW CROWN の使用語彙は難しくないですか。

Q4：Word Corner は全部やらなければならないのでしょうか。

＜音声・文字＞

Q1：フォニックスの扱いはどうなっているのでしょうか。

＜1 年＞

Q1：1 年の最初が be 動詞から導入されているのはなぜですか。

Q2：一般動詞の過去形に関して，1 年の終わりに不規則変化動詞まで導入されるようになったのはなぜですか。

＜2 年＞

Q1：2 年 LESSON 8 の受け身形はなぜ by のない形から導入されているのですか。

＜3 年＞

Q1：3 年 LESSON 2 の現在完了形は，なぜ「継続用法」から導入されているのですか。

D　言語活動について　23

＜とびら＞

Q1：各レッスン「とびら」のねらいはどのようなものでしょうか。

Q2：とびらはどのように扱ったらよいでしょうか。

＜GET＞

Q1：GET の Drill はどのように扱ったらよいでしょうか。18 年度版の Check It と違いはどのようなものでしょうか。

＜USE＞

Q1：USE Read のねらいはどのようなものでしょうか。

Q2：USE Read はどのように扱ったらよいでしょうか。

Q3：USE Read の In Reading にある英問英答はどのように扱ったらよいでしょうか。

Q4：USE Read，Let's Read，Further Reading はねらいや扱い方が違いますか。

Q5：USE Mini-project はどのように扱ったらよいでしょうか。

＜We're Talking＞

Q1：We're Talking のねらいはどのようなものでしょうか。

Q2：We're Talking のどのように扱ったらよいでしょうか。

E　小中の接続について ―――――――――――――――――――――――――――― *29*

Q1：Get Ready のねらいはどのようなものでしょうか。
Q2：Book 1 pp.6～7 の Get Ready 1 はどのように扱ったらよいでしょうか。
Q3：Get Ready の単語はどのような基準で選択していますか。
Q4：1 年 LESSON 1～3 の特徴はどのようなことでしょうか。
Q5：音から文字への移行について，どのように配慮していますか。
Q6：『英語ノート』（文部科学省）との関係はどう配慮しているでしょうか。
Q7：ローマ字の扱いはどうなっていますか。

F　その他について ―――――――――――――――――――――――――――― *34*

Q1：NEW CROWN はアメリカ英語ですか，それともイギリス英語ですか。
Q2：発音記号は何を使っていますか。また発音記号が 1 年にないのはなぜですか。
Q3：1 年生「単語の意味を確認しよう」（pp.128～129）のねらいはどのようなものでしょうか。
Q4：巻末の「単語の意味」の特徴はなんですか。
Q5：音声 CD で，『Teacher's Manual』に入っているものと『指導用 CD』はどのように違いますか。
Q6：「カラーユニバーサルデザイン」や「化学物質過敏症」への配慮はしていますか。
Q7：表紙のコンセプトはどのようなものでしょうか
Q8：「発展的な学習内容」は扱っていますか。
Q9：GET 本文の書体と USE Read 本文の書体をどう使い分けていますか。

A　全体の方針について

Q1：24 年度版 NEW CROWN のコンセプトはどのようなものでしょうか。

A2：

英語教育をとおして，確かな学力，豊かな心と，地球市民（世界市民）としての資質を備えた人間を育成することを教育理念として，この理念を具現するために 3 つの教育目標を設定しました。

①　学ぶ力を育てる

学校教育においては集団での学習や体験の中で，自ら考え自ら学ぶことのできる人間を育成することが求められています。特に英語という外国語の学習においては，教室における聞く・話す・読む・書くという 4 技能の学び合いをとおして，自ら考えて学んだり応用したりできる力を身につけることが大切です。生徒の発達段階や個に応じた「学び方」,「わかり方」を身につけさせることで，ことばを学ぶ楽しさや喜びを与え，継続して英語を学び続ける意欲と動機を養います。

②　ことばを使う力を育てる

英語教育はことばの教育です。現代社会においては実生活で役に立つ英語力を身につけることが求められています。そのためには，語彙や文法を基本とする基礎学力を確実に身につけることで，英語を使うための基礎を養うことが何よりも大切です。ことばの運用は社会生活を営む上でとても重要です。実生活に即して英語を使うさまざまな体験と,「ことば」の大切さや「ことばの働き」について学んだり考えたりする活動をとおして豊かな英語の使い手を育成します。

③　他とかかわる力を育てる

英語教育で期待されることのひとつは，多様な価値観をもつ世界のさまざまな文化や地球環境に自らを関係づける力をつけることです。他とかかわって生きていくためには自己を確立し，他を受け入れ尊重することのできる豊かな心をはぐくむ必要があります。そのためには，英語の学習を通じて視野を広げ，同時に自分の考えや自分たちの文化を外に発信していくことが大切です。人間の生き方について考え，他とかかわる経験をとおして，地球市民の資質を培います。

Q2：18 年度版からの改訂のポイントは何ですか。

A2：

一言で言うと「題材重視の姿勢は堅持しつつ，教えやすく，学びやすい教科書にした」ということです。以下，主な改訂のポイントを挙げます。

・時間数の増にともない，ページ数にして 2 割増やしました。
・レッスン構成をページごとのねらいを明確になるよう大幅に変更し，基礎的な知識・技能の習得と，それらを活用できる力の育成ができるようにしました。
・1 年冒頭部分を大幅に改訂して，小中の接続がスムーズになるようにしました。
・自学自習できる工夫を随所に配置し，自ら学ぶ力の育成を図りました。
・USE Read を新設し，言語活動の各段階で「書く」活動を強化し，「読む」「書く」を含めた 4 技能の総合的に育めるようにしました。
・各レッスンに Word Corner を配置し，語彙増強を図るとともに，活用を通して語彙を習得できるようにしました。
・従来より NEW CROWN は，題材が「バラエティに富んでいる」「面白い」「生徒に考えさせる」などの評価をいただいておりますが，この点については，自然科学，伝統文化の話題を強化しつつ，継承発展させました。

Q3：時間配分はどうなっていますか。

A4：

各学年の時間配当は次のとおりで，年間 140 時間の 60%強となっています。

1 年：88 時間
2 年：87 時間
3 年：85 時間

上述の時間配当は以下のそれぞれのパートの時間配当の積み上げです。

GET	1 見開き 2 時間（とびらは，GET Prat1 に含む）
USE-Read	1 見開き 2 時間
USE-L/S/W/M	1 見開き 2 時間
まとめ	1 見開き 1 時間

Let's Read （Start Reading 含む）	1 ページ 1 時間
We're Talking	1 ページ 1 時間

1 年 Get Ready	1 見開き 1 時間
1 年 LESSON 1～3	1 見開き 1 時間
1 年 Words & Sounds	1 ページ 1 時間
1 年 単語の意味の使い方， 辞書の使い方， 英語の文章の読み方	1 ページ 1 時間

Q4：レッスン構成を大幅に変えた意図は何ですか。

A4：

以下のような観点から，レッスン構成を大幅に変更いたしました。

・新学習指導要領で求められている「習得と活用」「自立的な学習者の育成」「４技能の総合と統合」「繰り返し」などが発揮できる教科書をめざしたこと。

・1 つ 1 つのパートの役割と指導の手順・学びにプロセスを明確にして，指導しやすい，学びやすい教科書をめざしたこと。

・従来，文法導入や表現のためのモデル，あるいは読み物といった複合的な役割を担っていた本文の位置づけを，GET と USE とに分けて，役割分担をはっきりさせ，指導のポイントがしぼりやすい教科書をめざしたこと。

Q5：分量を増やしたのはなぜですか。

A5：

分量を増加しています。その理由は下記の 3 点です。

① 新学習指導要領との関係（3 時間→4 時間）

新学習指導要領では，時間配当が 3 時間から 4 時間と 4/3 になりますので，必然的に教科書も増量ということになります。

② 教育界で教科書の質量の充実がもとめられている

国の教育行政や世論として教科書の質量の充実が求められているということがあります。これは学力低下の傾向への対応の 1 つとしてのことです。先進国や近隣諸国の教科書と比較してみても，我が国の教科書は，量的に少ないのが実態です。

しかし，ここで注意しなければならないのは，教科書に対する考え方を少し改める必要があるのではないかということです。つまり，教科書に記述されている内容のすべてを学習しなければならないとする教科書観から，個々の生徒の理解の程度に応じて指導を充実させたり，生徒が家庭でも主体的に自学自習できるような教科書観に変えていく必要があるということです。

③ そもそも語学の学習は量がものを言う。

英語は基本的には技能教科ですので，運動と同じように量の確保は不可欠です。多くの質のよい英文に触れ，自分で英語を使う場面を多くすることが英語の上達につながります。特に 24 年度版では，読む本文の分量が多いという印象をもたれるかもしれませんが，1 年から段階的に増量して，高校英語につなげる（高校の標準クラスの英語教科書の 1 年の LESSON 1 は，300 語程度です。高校入試は，300 語～400 語の長文が出るのが当たり前になっています）という意味合いから，量的には適当であろうという判断をしています。

ただし，週 3 時間で行っている現行学習指導要領下での使用実態を見てみると，分量がきついという声もあることも事実ですので，単純に配当時間の増量分＝教科書の増量という具合にはいかないと思います。そこで，24 年度版において，分量増については以下のような方針で臨みました。

- 全体として 2 割の増量を図る。
- レッスン数は 18 年度版と同じ。
- 増えているのは活用にあたる部分，および付録で，これらは地域や生徒の実態に応じて，弾力的に運用できるようする。
- Try や付録など，選択的に扱える部分を充実させ，さらなる増量を望む場合に対応できるようにする。

Q6：本文の役割は何ですか。

A6：

そもそも教科書の本文には以下の役割がると考えられます。

① 文法の導入・習得

② 習得した文法の応用・確認

③ 読むスキルを育成させるためのトレーニング・現実世界での行う読みのリハーサル・シミュレーション

④ 生徒が表現活動をするためのモデル

⑤ 人間的な成長を促す素材

24 年度版の本文は，以下のコーナーにあり，各コーナーには，それぞれに異なる本文の役割があります。

	①	②	③	④	⑤
Lesson-GET	○			○	
Lesson - Use Read		○	○		○
Let's Read			○		○
We're Talking				○	

Q7：NEW CROWN は学校教育としての英語教育をどのように考えていますか。

A7：

学校教育としての英語教育は，英会話学校などの英語教育とは異なり，人間形成の教育として子どもたちの言語能力を全面的に発達させるためのことばの教育であると考えられます。ことばの教育は，ことばに対する考え方や思考力を育て，ことばの技術・技能の基礎・基本を習得することが中心となりますが，英語教育は外国語教育として，国際理解教育に対しての大きな役割も担っていると考えています。

Q8：ことばの教育についてどのように考えていますか。

A8：

ことばを自由に話すことができるようになったという結果だけでは，ことばの教育が行われたとは必ずしもいえません。ことばの教育が行われるということは，①ことばについてよく考えて言語観を形成すること，②考える力，思考力を伸ばすこと，③ことばの技術・技能の基礎・基本を習得すること，などが必須であり，そのような学習なしには子どもたちの言語能力の全面的発達を保証することはできないと考えています。

B　題材について

Q1：なぜ NEW CROWN は題材を重視しているのですか。

A1：

学習指導要領の英語科の目標を見ると，題材内容に関するねらいはありません。しかし, NEW CROWN は昭和 53 年度版の初版から題材を重視して編集をしてきており，今回の改訂にあたっても，それを継承しています。なぜ題材が重要なのでしょうか。

以下の 3 つの側面から題材が重要と考えています。

① 題材が人間教育に寄与するという側面

② 題材が学習意欲を促すという側面

③ 題材がエピソード記憶を促すという側面

以下，詳述します。

① 人間教育的に寄与するという側面

生徒の知的な好奇心に訴える題材，発達段階に応じた読み物などは，読んだり聞いたりした内容について知識を得たり，感動したり，という最も素朴な反応を引き出し，さらに読んだ内容について自分に照らし合わせて考えるという内省的な知的活動を促します。こうした活動は，英語の力をつけるとともに，人間的な力をも引き上げることになります。新学習指導要領でいえば，思考力・判断力にあたるところです。

② 題材が学習意欲を促すという側面

そもそも英語は外国語なので，生徒にとってリーディングであれ，リスニングであれ，英文にあたることはハードルが高いと言えます。それに立ち向かわせるために，題材は大変重要な役割を担います。生徒にとって好きな内容，ためになりそうな内容ということが，読んでみよう，聞いてみよう，という気持ちを起こさせます。

中学校の先生がたから，このレッスンは生徒のくいつきが違う，ということをよくお伺いします。それは，そのレッスンの題材が生徒の頭と心に訴えて，英語の授業に積極的に向かわせていることを物語っているのであろうと考えられます。

③ エピソード記憶を促すという側面

英語の上達には語彙や文法，表現などを身につけていくことが欠かせませんが，そうした言語材料が定着する際に力になるのは，言語材料が使われている文脈，つまり題材内容ということです。Discrimination という難しい単語であったとしても，キング牧師のお話の中で出会ったとすれば，語彙と題材がしっかりと結びつきます。たとえその場で身に付かなかったとしても，後々の場面で，あのレッスンで出て来たでしょう，と思いだすきっかけになります。

Q2：題材の選択の方針はどのようなものでしょうか。

A2：

題材選定にあたっては，各学年に以下に示す 7 つの領域をバランスよく配置することをこころがけました。

①学び，②ことば，③日本文化，④異文化，⑤自然理解，⑥社会理解，⑦人間理解

まず，⑤⑥⑦は，それぞれ，自然科学，社会科学，人文科学という学問の領域にそれぞれつながるものです。③と④は，英語科が言語教育であると同時に，国際理解教育の性格を多分に持っている教科であることから，位置付けてあります。他者を認め，人種や文化の違いにも寛容な態度の育成を図るとともに，自文化をあらためて知り，自己のアイデンティティーを確立し，それを異文化の人にわかってもらえるような発信力を育成することが，国際理解教育の重要なポイントであることに符号しています。②は，言語教育の役割として，言語とは何か多角的に扱う題材を配置することによって，言語に対する興味づけを行い，偏りのない言語観を身に付けてほしいと願うからです。①は，24 年度版の改訂にともない，自ら学ぶ力を育成する教科書づくりを主眼としていることから，題材に関しても「学び」につながるものを生徒たちに触れさせたいという考えから 1 領域位置付けました。

Q3：姓名の順序は Tanaka Kumi 式でよいのでしょうか。

A3：

人それぞれの固有の名前は，その人や民族のアイデンティティーを示すものであり，英語表記の中であっても，もともとの順序を尊重して表記されるべきである，という考え方に基づくものです。これは国際理解の原点ともいうべき視点であります。NEW CROWN では昭和 62（1987）年度版から，日本人の名前を＜姓＋名＞の順序で表記してきました。わが国の国語審議会答申（2000 年 12 月 8 日）で「国際化に伴うその他の日本語の問題」として「姓名のローマ字表記についての考え方」が取り上げられ，「…日本人の姓名については，ローマ字表記においても＜姓＋名＞の順とすることが望ましい…」と記されております。平成 14 年度版の改訂で，他の教科書にも日本人名を＜姓＋名＞の順序にするものが出てきており，NEW CROWN がパイオニアとしての役割を果たしたことになります。なお，ご存じのように実際に個人でも＜姓＋名＞の順序にしている人も多くなっていますし，出版物も Mainichi Weekly，Japan Quarterly，Asia Week などは Tanaka Kumi 式を採用しています。また，東アジアの漢字文化圏の主だった国，例えば韓国・朝鮮，中国，ベトナムなどでは＜姓＋名＞の順序をとっていて，これで不都合を生じていません。

最後に，この種の問題は強制されるべきものではありません。そのため，教科書では英語式もあることを明示しています（1 年生 p.17）。いずれをとるかは個人の自由です。異文化理解，自文化理解につながる教材として，生徒に投げかけてみてください。

Q4：英語の教科書でなぜ英語圏以外の国や地域を扱うのでしょうか。

A4：

異文化理解の題材としてとりあげる国や地域は英米に偏ることなく，英語を第二言語としている国・地域，英語を外国語としている国・地域をとりあげています。異文化理解教育のねらいとして，文化の多様性にふれ，それらを認める態度を育成する，ということがあります。英語圏だけに偏るのではなく，さまざまな国・地域を扱うのが，異文化理解教育の観点から適当と考えたからです。

Q5：なぜ英語の教科書の登場人物にインド人や中国人が出てくるのでしょうか。

A5：

英語が単に英語国民のものではないという，国際語としての英語の姿勢を出すことが必要だからです。逆に，登場する外国人がすべて英語国民だと，生徒の目は英語国に集中して，英語国民と英語で話すことが，唯一国際人となる道だと考えてしまいます。つまり，ほかの民族や言語が視野に入りません。これでは，国際理解に相反するものになってしまいます。

英語を母語としている人は3億5千万人くらいといわれていますが，これに加えて，自分の母語を持ちながら，英語を第二言語として使っている人たちがこの倍くらいいます。その上，日本のように英語を外国語として学んでいる人は約 7 億人です。このように英語が世界のさまざまな人々の意思疎通の手段として使われる言語となっていることを考えますと，教科書でもこれを反映させる必要があります。インド人や中国人を登場させると，生徒の目は自ずとアジアや世界に向けられます。また，本教科書でもそうしているように，英語以外の言語も多少ですが扱えます。これはいろいろな異文化の理解と外国語の導入である教科として大きな意義があります。このように NEW CROWN では本質的な意味で国際理解を追求するために，登場人物に英語圏以外の子どもたちを登場させています。

C　言語材料について

＜文法＞

Q1：24 年度版の文法配列で，18 年度版との主な変更点はどのようなものですか。

A1：

今回は以下のような点に配慮し，文法配列を変更しました。

配慮した点	主な例
①小英との関連	●He is ... / She is ... を LESSON 5 から LESSON 2 へ →be 動詞の is に関わる表現をまとめて出し，is を定着させるため，また，小学校外国語活動で I（1 人称）と you（2 人称）に関しては慣れ親しんでいるため。 ●can を現在進行形より前に →can の言い方は外国語活動で慣れ親しんでいるため。
②サブ的な項目の格上げ	●When do you ...? を会話のコーナーからレッスンに →where とともに，文法項目として重視したため。 ●be going to ... を会話のコーナーからレッスンに →be going to ... を文法項目として重視したため。
③学習指導要領の改訂に伴った順序の入れ換え	●関係代名詞を分詞の後置修飾・接触節の前に →上記の順序のほうが学習者の理解が容易であると判断したため。

Q2：レッスンの GET で，疑問文・否定文など 2 つの項目が配当されているところのねらいはどのようなものでしょうか。

A2：

今回の構成では，Part 1 にその文法の肯定文，Part 2 に疑問文・否定文という配置を多く採用しています。まず肯定文でその文法のポイントをしっかりと押さえ，疑問文や否定文などの形は言語活動を通して，自然な流れの中で習得することを意図しているからです。実際の授業でも，文法導入の際に肯定文・疑問文・否定文をまとめて指導される先生もいらっしゃることと思いますので，そういった授業にも即した構成となっているのではないかと思います。

また，2 年生 LESSON 5 の GET Part 2（不定詞の副詞用法・形容詞用法）は，形容詞用法が他の項目に比べて習得しやすい項目であること，また活動のバリエーションがあまり多くないことなどの理由で，副詞用法とまとめて提示しています。

文法の指導にも，項目によって軽重をつける形で提示した結果，このような配置となっています。

Q3：POINT のキーセンテンスが本文と違うのはなぜですか。

A3：

キーセンテンスは，以下のような原則で作っています。

① 文のしくみが見た目でよくわかる。
② 既習の文との対比ができるようにする。
③ 基本的に新出語は入れない。
④ Drill につなげる。

キーセンテンスを本文からの引用にすると，文脈への依存度が高くなり，代名詞が使われたり，修飾的な言い回しがつくなど，その一文だけで意味を理解するということが難しくなったり，シンプルな文になりにくいということがあります。(①②)

また，本文から引用された文には新出語が入る可能性があります。本文を理解してからポイント文にいく場合はいいのですが，先にポイント文に取り組む場合もあるので，その場合新出語がネックになります。(③)

さらに，ポイント文は，Drill の A の例文となっており，B 以降の語句の入れ替えがしやすいことが求められます。(④)

以上のことから，キーセンテンスは，慣れ親しんだ既習語を使い，できるだけ文の構造をとらえやすく，典型的で暗記しやすい文になるようにしました。

Q4 : I'm などの短縮形と，I am などの短縮されない形の出し方の基準はあるのですか。

A4 :

本文中において，初出のものについては，それが対話文であっても完全形で出すということを基本にしています。そのほうが，句の構造の理解がしやすいからです。それにより，例えば，will の否定形に関して，won't が will not の短縮形であることを知らないことになるというような事態を避けることができます。

また，既習のものについては，対話文の中では縮約形，叙述文の中では完全形で出すようにしています。なお，POINT の中では，完全形と短縮形の両方を提示し，学習者がどちらの形に出会っても対応できるように配慮をしています。

＜語彙＞

Q1：使われている単語はどのように選定されているのですか。

A1：

平成 24 年度版では，主要辞書の頻度ランクのほか，英検での出現率，NEW CROWN 以外も含めた主要教科書での出現率，中学生の学習者コーパスでの出現率などもあわせて検討し，語彙を精選しています。それらの語彙を頻度やひろがりを考慮して,①最重要語（545 語），②重要語（398 語），③その他の語（294 語）の 3 つのグループに分け，学習の目安としました。①＋②が学習指導要領で示された 1200 語程度にあたります。

なお，Get Ready，言語活動の IDEA BOX，付録の Further Reading や「いろいろな単語」に出てくる単語は習得の対象ではありません。

Q2：Words 欄の単語の書体の違いは何を示していますか。

A2：

Words 欄の点線（-----）上の語が習得すべき語で，点線下の語がふれるだけでよい語です。

さらに，点線上の語にも「最重要語」，「重要語」の区分けがあります。

○「最重要語（545 語）」：点線上の太字語
○「重要語（398 語）」：点線上の細字語
○「その他の語（294 語）」：点線下の細字語（訳付）

＊ イタリック体はまとまりで覚えたい連語，表現を示します（単語とは別扱いの語で，単語数にはカウントされていません）。
＊ LET’S READ は「読みに集中する」という目的があるため，点線上の語であっても，訳をつけてあります。

Q3：NEW CROWN の使用語彙は難しくないですか。

A3：

何が難しい語かを簡単に論じることはできませんが，例えば，1 年の ancestor（LESSON 8），2 年の sacred（LESSON 6）などはそうかもしれません。なぜこのような語彙が使われているのかと言いますと，ひとえに扱われている題材内容の質を高めるためです。生徒の知的興味に応えられる内容を提供しようとしたときに，こうした語彙を用いないで本文を作ることは非常に困難です。最終的にこの種の語の意味をどの程度習得させるかは，生徒の興味や関心によって決まることですが，編集の意図としては，全員がこの種の語をすべて「言えるように，書けるように」ということではありません。そのために，Words 欄では点線を境に覚えるべき単語と画然と区別し，日本語の意味が付されているのです。

Q4：Word Corner は全部やらなければならないのでしょうか。

A4：

Word Corner の語彙も必修語の対象になっており，その中の新出単語は同じページの Words 欄に示してあります。ただし，やらなければいけないというよりは，コミュニケーション活動をしながら，活用を通して生徒に覚えてもらえるものと思っています。現在，先生方は，コミュニケーション活動をされる際，独自のかたちで「生徒が使いそうな語彙」を導入されていることと思いますが，Word Corner の語彙は，まさに，コミュニケーション活動で使える単語を，コーパスも駆使しながら選んだもので，ほぼ同ページにある Practice で使えるかたちにもなっているからです。ぜひ，Practice でコミュニケーション活動をしながら，また，イラストを使いながら，気楽に，効率的なかたちでふれていただければと思います。

＜音声・文字＞

Q1：フォニックスの扱いはどうなっているのでしょうか。

A1：

NEW CROWN では，「フォニックス」という用語は用いていないものの，フォニックスを取り入れた指導がしやすいように配慮した編集がなされています。

NEW CROWN では，まず 1 年巻頭の Get Ready 3 で，アルファベットの「名前読み」（A はエイ，B はビー，C はスィーなど）を導入した後で，Get Ready 4 でアルファベットの「アブクド読み」（A はア，B はブ，C はクなど）を導入し，アルファベットには大きく分けて 2 種類の音があることを理解させ，個々の文字と音の関係を結びつけます。

単語レベルでの文字と音の結びつきに関しては，1 年 LESSON 4 以降のレッスン末にある SOUNDS の「発音とつづり」において，継続的に扱っています。たとえば 1 年 p.51 では，a の文字には cat や bag などのように短い「ア」という音と，face や take などのように「エイ」という音があるということに気づかせ，母音字の 2 種類の読み方を整理して提示しています。このように，フォニックスの考え方は SOUNDS の随所に反映されています。SOUNDS は，ルールそのものを明示的に学習者に教えるのではなく，生徒の気づきを大切にしながら，英語の音声の特徴を知ってもらう活動が展開できるようにしてあります。

さらに，1 年と 2 年の巻末付録には，「つづりと発音」のページがあります。ここでは，発音ごとに既習単語の例を集めて，つづり字と音の関係を俯瞰的にながめることができるようになっています。同時に，日本人学習者にとって発音しづらい音について，発音の仕方が解説されています。

1 年初期の段階からフォニックスをルールとして明示的に出す形式をとっていないのは，その段階での学習者は，まだ語彙の蓄積がないためです。フォニックスのような規則は，語彙の蓄積がある程度されて初めて有効であり，また本格的な指導も行える，という考え方をとっています。

＜1 年＞

Q1：1 年の最初が be 動詞から導入されているのはなぜですか。

A1：

以下の観点がから，1 年 LESSON 1 については，be 動詞から導入しています。

① 文のしくみがシンプルで学びやすい。（文法指導の観点）

be 動詞の文は一般動詞に比べ，文の構造がシンプルで，初学者にとって学びやすい文法項目であるといえます。

例えば，疑問文を作るとき，一般動詞であれば do や does など，肯定文の中ではない語を補わなければなりませんが，be 動詞は語順を変えることで疑問文を作ることができます。

また，一般動詞で自己表現をするとき，I like ～. などの表現を使いますが，複数形などがまだ定着していない初期の段階でこのような表現をさせると，*I like dog. *I have book. などの文法として誤った表現をしてしまうおそれがあります。

そういった，初学者に負担の少ない項目から文法を導入することを重視した結果，be 動詞からの導入になりました。

② 出会いのコミュニケーションの場面にふさわしい構文である（話題，コミュニケーションの観点）

be 動詞から導入されるのは，1 年の最初に行われる言語活動，「自己紹介」との相性がいいことが理由にあげられます。「自己紹介」は，まず「自分の名前」を述べることから始まりますが，それは初対面の人とコミュニュケーションを図っていく際の，第一歩となります。自分の名前を述べる際には，当然のことながら be 動詞を使います。

③ 言語の本質をとらえており，言語教育の第一歩としてふさわしい。（言語教育の観点）

森羅万象のものごとに名前がついている，という認識は言語の本質です。その本質の部分を，A=B という形で端的に表している be 動詞構文は，その言語教育の第一歩にふさわしいものと考えられます。NEW CROWN ではそのような表現を LESSON 1 に配置しました。

④ 先生がたが be 動詞導入の指導に慣れている。（現場感覚の観点）

歴史的にも，現在においても多くの教科書が be 動詞からの導入になっており，この配列については現場でもある程度定着していると思われます。そういった現場の実態，指導のしやすさという観点からも，この文法配列がふさわしいと考えています。

Q2：一般動詞の過去形に関して，1 年の終わりに不規則変化動詞まで導入されるようになったのはなぜですか。

A2：

自己表現をするとき，過去形の規則変化と不規則変化の両方を学習することで，より言いたいことが表現できるようになると考えたからです。また，実際に使われるのは不規則動詞のほうが多いことも理由のひとつです。なお，一般動詞の過去形に関しては，1 年で学習したあとで 2 年の LESSON 1 でも復習できるように手当てをしています。

＜2 年＞

Q1：2 年 LESSON 8 の受け身形はなぜ by のない形から導入されているのですか。

A1：

受け身形は，能動形とのペアとして扱われ，by が使われている形から導入されがちなこともあります。しかし，受け身形は，by がない形のほうが，by がある形よりも圧倒的に頻度が高いといわれているのです。その理由のひとつに，受け身形が使われるのは，行為者よりも行為を受ける対象に視点や情報の焦点があり，行為者は不明であるか問題にしない場合が多いことが考えられます。一方，by で行為者を明示する場合は，あえて行為者を強調する場合か，新情報として行為者を導入する場合です。

NEW CROWN では，受け身形が肯定文とペアでとらえられ，そのどちらが使用されてもいいという誤解を避けるよう，そして，受け身形の意味がきちんと理解されるよう，by のない受け身形から導入されているのです。

＜3 年＞

Q1：3 年 LESSON 2 の現在完了形は，なぜ「継続用法」から導入されているのですか。

A1：

現在完了形は，中学生にとって理解しにくい文法項目のひとつです。この導入を完了・継続・経験のどの用法にするかについては諸説があり，どれかひとつが絶対的に正しいとはいえませんが，NEW CROWN では「過去から現在までの状態」が現在完了の本質だと考えられ，その点で，継続用法から導入するのが最も適切だと考えました。

D　言語活動について

＜とびら＞

Q1：各レッスン「とびら」のねらいはどのようなものでしょうか。

A1：

1 年の LESSON 7 以降は原則として「とびら」が 1 ページ配置されています。このページの目的は，「学習の見通しをたてること」ですが，具体的には以下の 2 点です。

①　これから学ぶ内容への動機づけ

とびらの色地の部分には，LESSON タイトル，写真またはイラスト，2 つの Q が配置されています。

それらは，生徒にこれから学ぶ内容について，自分の既知の情報を思い起こさせたり，どんな内容なのかを想像させたり，というブレーンストーミングのためにあります。

②　レッスンのねらいの確認

とびらの白地の部分には，「題材」「言語材料」「言語活動」の目標が書き出されています。生徒たちに，書き出された「この課で学ぶこと」を意識した上でレッスンの内容に入ってほしい，という意味で位置づけてあります。24 年度版 NEW CROWN の 3 つの柱の中の「学ぶ力を育てる」の具体化の 1 つです。なお「この課でまなぶこと」は，「とびら」のページのない 1 年の前半や，2，3 年の LESSON 1 については，タイトルページ（見開き）に配置しています。

なお，タイトルや Q で新出単語になっているものがありますので，その場合はここが初出ということで Words 欄に提示してあります。

Q2：とびらはどのように扱ったらよいでしょうか。

A2：

GET Part 1 に入る前に, 10 分～15 分ほどの時間配当が標準ですが, 進度に応じて, 弾力的に扱うことができると思います。18 年度版にも同様のとびらがありましたが, ヒアリング調査によれば，動機付けのためにここに 1 時間かけたり，さっと 1，2 分触れる程度ですませるなど，さまざまな使い方をなさっています。

～活動のイメージ～

・LESSON タイトルのキーワードについて自分の知っていることを出し合ったり, これからどんな内容が展開されるのを想像させ，思ったことを言い合うなどの活動。

・写真やイラストを見ながら，そこに何があるのか，だれがいるのか，何をしているのか，何のためにそうしているのか，などについて教師と生徒でのオーラルインタラクション。オーラルインタラクションのヒントとなるように 2 つの質問が配置されています。原則，写真について 1 問と，トピックと自分との関わりについて 1 問です。教科書に載っている質問は 2 つだけですが，それは発問例の 1 つなので，教師側からさらに具体的な質問をして，題材に対する理解を深めてもらいたいと考えています。補充の質問例は, 指導書や NEW CROWN のウェブサイトを参考にしてください。

＜GET＞

Q1：GET の Drill はどのように扱ったらよいでしょうか。18 年度版の Check It と違いはどのようなものでしょうか。

A1：

今回の Drill は，タイトルの通り，文の型に慣れる「ドリル練習」にこだわりました。活動の流れは，

① Listen（文を聞いて確認する）
② Repeat（音声のあとについて言う）
③ Say（キーワードや絵をヒントに英文を言う）
④ Write（練習した英文を書く）

となっています。

18 年度版の Check It とよく似ていますが，今回はドリル練習に重点を置いたため，リスニング問題は入っていません。そのため，主語を男性にしたり女性にしたり複数にしたりと，いろいろ変えて練習できるようになっています（リスニング問題になっていると，リスニングのヒントになってしまうため，主語を変えることができません）。

なお，各学年とも Drill の初出の対向ページに「Drill の使い方」の説明を載せています。

＜USE＞

Q1：USE Read のねらいはどのようなものでしょうか。

A1：

USE Read は，1 年 LESSON 7 以降のすべてのレッスンに収められた，「読むこと」に特化したページです。従来の教科書と大きく違うことは，従来の本文は「文法の導入」という大きな役割を担っていたのに対し，USE Read は文法の導入を目的としていないということです。

「読むための本文」を提案しています。残念ながら，これだけの本格的な読みものを，新出語なしで作成することは不可能ですから，新出語の導入だけは，これまでの本文同様，行わざるを得ません。しかし，文法の導入・解説という作業を経ることなく，「読む」段階へと進むことが出来ます。レッスンの文法事項は USE Read の中にも繰り返し登場しますが，読む作業をとおして文法の復習・定着を図ることができます。また，USE Read のねらいはあくまで「読む力を伸ばす」ことですので，長い本文の一字一句までを吸収することは，必ずしも必要ではありません。

Q2：USE Read はどのように扱ったらよいでしょうか。

A2：

タスクに沿って授業を展開してゆけば，自然に読みを深めていくような授業展開ができるような設計になっています。

まず Pre-Reading で生徒の頭をウォームアップするとともに興味関心を高め，次に In-Reading の 1 で全体の簡単な概要だけをとらえる読みを行い，In-Reading の 2 で各段落の中心となる内容を確認し，In-Reading の 3 では内容を整理するためにもう一度読み返し，最後に Post-Reading で読んだ内容についてもう一度考えたり，自分の意見を確認したり，という活動をする，という流れになります。

目安として 2 時間が配当されていますが，最初の 1 時間は概要をとらえる活動を中心に, 2 時間目に細部を理解していく活動を中心に展開することが望ましいと考えます。

新出単語の導入については，読む前に，フラッシュカードや指導書にあるワークシートを使って導入する，Pre-Reading の活動をやりながらキーとなる単語については導入する，いきなり本文にあたらせてわからない単語は辞書を引かせる辞書指導の機会ととらえる，などいくつかのアプローチがあると思いますので，生徒実態や指導計画に鑑みて，扱いを決めていただければと思います。

いずれにせよ，英文を読んで内容理解する力をつけることがこのコーナーの趣旨ですので，ピクチャーカードを使ってオーラルイントロダクションで内容理解をさせてから英文にあたらせるよりも，いきなり英文を読ませる，何回もねらいを変えて読ませる，ということが望ましいと考えられます。

Q3：USE Read の In Reading にある英問英答はどのように扱ったらよいでしょうか。

A3：

以前の教科書にも Q&A というコーナーがあり, 本文の内容理解に関して英語の問いに英語で答える, いわゆる「英問英答」形式でした（現行版でも指導書や Teacher's Book に掲載されています）。内容理解の確認という役割もさることながら，英語の問いにきちんとした英文で答えるということ自体が，英文の構造理解につながり，また英検の面接にも役立つとして，多くの先生方から支持されてきました。高校で「授業は英語で行うことを基本とする」ことになりましたが，中学校でも授業の多くを英語または英語と日本語を取り混ぜた形で進める先生が多くなっています。

しかし，英問英答はややハードルが高いのも確かです。クラスの状況によっては，英語の問いを投げかけたあとに日本語で意味を確認してあげる，あるいは英語の問いに対してまずは日本語で答えさせるなど，足場掛けをして利用していただければと思います。

Q4：USE Read，Let's Read，Further Reading はねらいや扱い方が違いますか。

A4：

前述の通り USE Read は「読む」力を育成するためのコーナーです。それに対して，LET'S READ は，知性よりも心に訴えるような題材内容が多く，また文学や劇など，「読みもの」として適したジャンルの作品を多く取り扱っています。読むことの楽しみを味わえるよう，生徒の心をつかみ，ぐいぐいと引っ張り込まれるような読書体験ができることを理想としているので，生徒が自力でも読み進められるように，Words 欄の新出語にはすべて日本語訳を付しています。しかしカリキュラム上の必修扱いですので，LET'S READ に使われている新出語も必修となります（Words 欄の点線より下の語を除く）。

Further Reading は，付録ですので必修ではありません。指導計画に余裕のあるとき，もっと読ませたいとき，長期休みの宿題として何か読みものがほしいときなどにご活用いただけます。付録ですので，いっさいの必修事項は含まれません。脚注には，未習語を中心に日本語訳を与えていますが，これらの語彙を学習する必要はありません。なお Further Reading は，1 年に 1 つ，2 年に 2 つ，3 年に 3 つの作品が掲載されています。

Q5：USE Mini-project はどのように扱ったらよいでしょうか。

A5：

Mini-project は，学年に 3 回の，言語活動の集大成です。いわゆる「英語のお勉強」「練習のための練習活動」にとどまらず，英語を使って実際に目的を達するような，現実的なタスクになっています。生徒は，それまでに身につけた英語力を総動員し，全力でチャレンジすることになります。教科書やノートを見直したり，友達と助け合ったり，先生の助けを借りたりしながら，困難を乗り越えて何かを達成する充実感を味わうこともできるでしょう。

これまでの教科書では，このようなタスクが不十分でした。そのため，中学校の先生方は，教科書を離れて，ご自身でこのような言語活動の「山場」となるタスクを用意しなくてはなりませんでした。今回は，学習指導要領でも，既習事項の「繰り返し指導」や，いくつかの技能をいっしょに使う「統合的な活動」が求められていることもあり，教科書の中にも，この種の大きな活動を設け，既習事項を総動員するような機会を生徒に与えることが妥当であると考えました。

＜We're Talking＞

Q1：We're Talking のねらいはどのようなものでしょうか。

A1：

We're Talking は，学習指導要領にある「場面」と「働き」に焦点をあてた単元です。買い物や電話，道案内など実生活での典型的な場面での会話を体験しながら，基礎的な会話表現を学ぶという趣旨です。

各 We're Talking の「場面」は，各学年 4 ページにある「各レッスンで学ぶこと」で示されています。各 We're Talking の「はたらき」タイトル下で◎○で示しています。◎はメインに扱っている項目で，Talking Point にもなっています。○はサブで扱っている項目です。

これらの場面とはたらきは学習指導要領で例示されており，We're Talking では，それらをほぼ網羅するよう各学年に配置しています。

Q2：We're Talking のどのように扱ったらよいでしょうか。

A2：

18 年度版では Do It Talk にあたるコーナーです。We're Talking では，実際によく起こりうる会話をシミュレーションすることになりますが，実生活で使えそうな内容なので，生徒は興味を持って取り組むことができます。以下のポイントをおさえながら取り組んでいただければと思います。

- 会話形式なので，ペアワークに向いており，授業が活発になります。
- 新出文法事項がないので，扱いに軽重をつけることもできます。
- 配当時間は 1 時間です。
- レッスンから独立したコーナーですので，レッスンの進度とは別進行にするなど弾力的に運用ができます。実際，18 年度版の Do It Talk は，ALT との Team-Teaching に向いているというおっしゃる現場の先生がたも多く，進度にかかわらず ALT の先生が来校される日に合わせて，Do It Talk に取り組む例が多く見られました。今回の We're Talking も同様の扱いをされるのも一案かと思います。

E　小中の接続について

Q1：Get Ready のねらいはどのようなものでしょうか。

A1：

Get Ready は，18 年度版の Let's Start にあたるところですが，小学校外国語活動が必修になったことを受けて，24 年度版では位置づけが若干変わっています。小学校での外国語活動のとりくみが地域や学校によって違うという現場の実態を踏まえ，中学校の学習内容に入る前に足並みをそろえるという趣旨で配置しています。

具体的な特徴は以下のようなことがあげられます。

・コミュニケーションの大切さを確認するパノラマ絵の Get Ready 1 を新設した。
・Get Ready でとりあげた単語や表現が『英語ノート』（文部科学省）を中心に選んであり，小学校のレヴューができるようにした。
・提示してある単語の分量は 18 年度版よりも増量。後に控えるレッスンの言語活動で，リファレンスとして使うことができるようにした。
・つづりと発音を意識した Get Ready 4 を新設した。

Q2：Book 1 pp.6～7 の Get Ready 1 はどのように扱ったらよいでしょうか。

A2：

小学校外国語活動のねらいのポイントは，コミュニケーション能力の素地づくりと言われています。素地はコミュニケーションに対する関心・意欲に結びつく概念であり，具体的に言うと，多少わからない単語があったとしても，相手の言うことを聞こうとする，あるいは自分の言いたいことをなんとか伝えようとする態度であるとか，コミュニケーションの大切さの認識などのことです。

Get Ready 1 は，小学校と中学校をつなぐところであり，中学校 3 年間のはじまりであり，さらに言えば高校までつながる 6 年間の英語科としてのはじまりでもありますので，そのことを確認しようというのが，本コーナーのねらいです。

具体的な指導は，以下のようなイメージです。

Get Ready 1 には，リスニング（英語）が 6 つ用意されています。その英語を 1 つずつ聞かせ，サイドに提示されている①～⑥の 6 つの場面と一致させます。それぞれの場面の会話に出てくる表現は，小学校外国語活動でよく出てくる会話表現です（英語ノートを参考にしました)。生徒は小学校での体験活動をふりかえり，教師は生徒の英語の「聞く力」の程度を確認します（用意されている英語で理解できない場合は，反応をみながら与える英語（情報やヒント）を変えていきます)。用意された 6 つの場面以外にも，教師が街のイラストのなかからある場面を取り出し（英語で話し)，生徒に英語を聞かして理解できるかどうかも確認することができます。

ことばには，あいさつしたり，たずねたり，あやまったり，という具合に，様々なはたらきがありますが，右下にある「絵や英語をヒントに，それぞれ何をしているか考えよう」がこれに該当します。6 つの場面や街のパノラマ絵の中では，いろいろな会話が交わされていますが，それらが，いったい何をしているところだろうか，どんな会話がかわされているのか，などを考えさせ，ことばのはたらきを意識させるのが，この活動のねらいです。日本語・英語でも構いません（おそらく日本語になるかと思います)。

こうした活動を通じて，いろいろな場面で人と人はコミュニケーションをしている，コミュニケーションを通じて人と人が結びつき合っている，コミュニケーションって大事だな，と生徒が思ってくれれば，このコーナーの目的は達成されると思います。

Q3：Get Ready の単語はどのような基準で選択していますか。

A3：

astronaut や hippo など，いままで中学校の英語の教科書ではなじみのない単語も出てきますので，少々戸惑われたかもしれません。

単語の選択にあたっては,『英語ノート』で扱った単語を中心に，カタカナ語などある程度生徒が想像できるものを若干加え，レッスンに入ったあとも中学 1 年の活動で使えるもの，という条件で単語を選んでいます。したがって，生徒たちが聞いてわかる可能性が高いものです。

また，Get Ready 4 の単語は，アルファベットの文字と音が学習できるようにという観点で選んでありますが，単語のつづりの中で英語の母音と子音のほとんどが現れてくるように設計しました。もちろん，ここでのポイントは「boy の b」のように単語の最初の文字と音になりますが，状況を見て,「green の ee」のように単語の中のつづりと音について，触れることも可能です。

Get Ready の中に出てくる単語は，必修語にカウントしていませんので，つづりまで身につけることをせずに，音に慣れ親しむまでとしています。

Q4：1 年 LESSON 1～3 の特徴はどのようなことでしょうか。

A4：

LESSON 1～3 では, いよいよ文のしくみを意識的に学んでいくことになりますが, 小学校外国語活動を踏まえた体験から学習，音から文字という流れを意識したレッスン構成にしてあります。

具体的な特徴は,

・音声に慣れていることを踏まえ，聞く活動から入っている。小学校で慣れ親しんだ表現が中心になっているやり取りを 3 つ聞くことで，リスニングのインプット量を豊かにする。

・1 パートの中に，聞くことから導入し，文法（文構造）を学び，読む―本文，話す―「話してみよう」，書く―「書いてみよう」の一連の活動を配置し，4 技能をバランスよく扱った。

・1 パートの構成を，従来のコマ割り吹き出し方式をやめ，本文を右ページにまとめて提示した。文字に対する意識づけをしやすいこと，文のしくみがわかりやすいこと, まとまった一連の会話文ということがわかりやすいということ, などから, そうした。

・LESSON 1 の「書いてみよう」では，無理なく書くことに慣れるように，書き方のルールを丁寧に示した。

Q5：音から文字への移行について，どのように配慮していますか。

A5：

Get Ready から LESSON 1 にかけて，音から文字への移行がスムーズに流れるように配慮しています。

・Get Ready 1 では，まったく文字がなく音声のみの活動を行います。

・Get Ready 2 で初めて文字を提示しています。ここでは音声のみの活動です。文字を読んだり書いたりする活動はありません。生徒たちは活動の中で，なんとなく文字を見ている程度です。

・Get Ready 3 は，はじめて文字の学習に取り組むところで，アルファベットの文字の形と名前を学習します。音声を聞きながら文字を導入します。

・Get Ready 4 は，アルファベットの文字が表わす音の学習です。イラストと単語（つづり）を見ながら，英語の音と文字の関係についての興味・関心を高めます。フォニックスの基礎的な部分です。この学習内容は 18 版までは扱っていませんでしたが，新学習指導要領の「つづりと発音」の項目に対応した形です。ここまでは単語レベルに触れている段階です。

そしてレッスン（LESSON 1～3）では，いよいよ文レベルの文字学習です。「聞いてみよう」では，3 つの会話を聞きますが，そのうちの 1 つを文字で表したのが，右ページの本文です。直前に聞いた本文を文字で確認し，その本文を読むという流れで，音から文字へとつないでいます。そして，これまでの音のやりとりから書き留める活動として，見開きの最後に「書いてみよう」を位置付けています。LESSON 1 の「書いてみよう」では，書き方のルールも丁寧に示してあります。

Q6：『英語ノート』（文部科学省）との関係はどう配慮しているでしょうか。

A6：

Get Ready では単語や表現を『英語ノート』から中心に選び，小学校の活動がレヴューできるようにしました。コミュニケーションの大切さを確認するパノラマ絵の Get Ready 1 は，小学校と中学校をつなぐところであり，小学校で扱った場面であり，また中学校でも扱う場面「あいさつ」「道案内」「買い物」「何であるかたずねる―What's this?」などが散りばめられています。Get Ready 2 では，『英語ノート』で扱った表現（My name is [I am] ～． I like ～． I play ～.）を軸にした上，『英語ノート』の単語（名詞―スポーツ，食べ物，果物，野菜そして動物）を中心に，聞いたり，話したり，ゲームなどといった活動をします。Get Ready 3 の単語も『英語ノート』の単語を中心に取り上げています。このように，Get Ready で慣れ親しんできた『英語ノート』にある表現と単語を使って，小中の接続がうまくいくように配慮しています。

なお『英語ノート』で扱っている単語と表現，そして場面と機能については，Book 1 の Get Ready を含め，各学年に LESSON の本文と We're Talking 等に配置しています。

Q7：ローマ字の扱いはどうなっていますか。

A7：

新学習指導要領ではローマ字は小学校国語 3 年生で扱うことになり，また『英語ノート』でもローマ字で名前を書く活動もしていますが，習得できていない子どももいるかと思います。p.138 の付録の「ローマ字表（ヘボン式）」を使い，生徒に指導していただければ，と思います。

ローマ字つづりを知っていることが，英語のつづりの学習に結びつくということは言えると思います。小学校の復習も兼ねている Get Ready で含めるという意見もありましたが，ローマ字つづりは日本語を記述する際の方法であり，英語の世界になっている Get Ready で扱うのに違和感があること，英語の単語のつづりとの相違点も少なくないので混乱する可能性あり，という判断で，従来から付録扱いになっています。

F　その他について

Q1：NEW CROWN はアメリカ英語ですか，それともイギリス英語ですか。

A1：

そのどちらにも偏っていません。日本人の学びやすさを考えて，どの国民や民族にも通じる英語を目指しています。今日では，英語を母語とする人々の数よりも，英語を母語としないものの日常的に英語を使っている人々の数のほうが多いのが現状です。後者の人々は自分たちの母語の影響を強く受けた英語を堂々と話しています。“Variety of Englishes”といわれるのもこういった理由からです。このような時代に，アメリカ英語かイギリス英語かという違いはあまり重要ではなくなってきています。お互いのコミュニケーションが成り立つ範囲の中で，自分たちが学びやすい，使いやすい英語を作っていく時代になっています。NEW CROWN の英語はこのような認識に立って，日本人のための英語を目指し，（1）日本で英語を学ぶ中学生にとっての学びやすさ・使いやすさ，（2）英語として正確に伝わること，を考慮した判断に基づいています。

具体的な例を挙げますと，つづりは color（英は colour），center（英は centre）などに見られるよう覚えやすさを優先し，アメリカ英語を取り入れています。句読点は生徒の負担を軽くするためイギリス英語を取り入れて，too の前のコンマや Mr や Mrs のあとの省略を示すピリオドを取りました。文法は一般動詞の have の否定を don't have とし，助動詞の have との違いを明確にするなどアメリカ英語にしています。

Q2：発音記号は何を使っていますか。また発音記号が 1 年にないのはなぜですか。

A2：

発音記号は国際音標文字（International Phonetic Alphabet = IPA）を使用しています。ただし，精密表記ではなく，簡略標記で記載しています。

次に，1 年の教科書の本文の側注（Words 欄）の新出語は発音記号を示していません。英語を学び始めた英語の文字が定着していないこの時期の生徒たちが，英語の文字と発音記号とを混乱することのないようにという配慮です。ただし，強勢については，発音面での強勢の重要さを意識できるように，第 1 強勢の位置に印（▼）をつけています。発音記号に興味をもっている生徒のため，あるいは発音記号を用いて指導する，ということも考慮して，2，3 年の教科書の脚注（新出語）には発音記号をつけています。

また，各学年の付録の「単語の意味」ではそれぞれの単語に発音記号をつけていますし, 1, 2 年の付録には, つづりと発音の関係が発音記号とともに示された一覧表（「つづりと発音」【母音】,「つづりと発音」【子音】）がありますので，必要に応じてそれらを使いながら発音指導をすることもできるようになっています。

Q3：1 年生「単語の意味を確認しよう」（pp.128～129）のねらいはどのようなものでしょうか。

A3：

NEW CROWN では，生徒が辞書を引くスキルが身に付くように，1 年生には「教科書の「単語 の意味」を活用しよう」（p.53），「辞書で単語の意味を調べよう」（p.75）といった辞書指導のためのコーナーがとくに設けられています。1 年生の LESSON 1~4 は文字に慣れていない時期であることを考慮して，単語の出現順に配列されている「単語の意味を確認しよう」を設けてあります。

「単語の意味」は，単語索引であると同時に，教科書に出現する全単語を収載した一種の「辞書」であるわけですが，「単語の意味を確認しよう」は，「辞書をひくことの第一歩＝「単語の意味」のページを使いこなすこと」に慣れるための，いわばウォーミングアップ のためのコーナーと位置付けています。「単語の意味を確認しよう」に収録されている単語はすべて，次ページからの「単語の意味」にも収載されています。

Q4：巻末の「単語の意味」の特徴はなんですか。

A4：

NEW CROWN の「単語の意味」は，まず形だけの単語リストではなく，小社から刊行されている『初級クラウン』に準拠しており，教室に辞書の備えがなくても，辞書指導ができるように作られています。また，2 年，3 年では，それまでの学年で出てきたものも含めて教科書に出てくるすべての単語を取り上げていますので，既習語彙で忘れた単語があっても，使用中の学年の教科書でそれを調べ，確認することができるようになっています。冠詞，前置詞，接続詞などの機能語には，その用法がわかるように例文を極力つけるようにしてあります。

Q5：音声 CD で，『Teacher's Manual』に入っているものと『指導用 CD』はどのように違いますか。

A5：

教師用指導書『Teacher's Manual　⑥』に入っている音声 CD（4 枚）には教科書の中のリスニングのタスクに関する音声が入っています。教科書本文や新出語などが必要な場合は『指導用 CD』（14 枚組）をお求めください。

Q6：「カラーユニバーサルデザイン」や「化学物質過敏症」への配慮はしていますか。

A6：

「化学物質過敏症」については，再生紙のなかから漂白がきつくほどこされていないものを選び，またインクも大豆油インクを使用し，化学物質過敏症者に配慮しています。「カラーユニバーサル」については，問題の設定やアイコンの設計，色配分などを工夫し，色弱（色覚異常）者に配慮しています。

Q7：表紙のコンセプトはどのようなものでしょうか。

A7：

中学生の各学年の発達段階を考慮して，1 年は「出会い」，2 年は「探求」，3 年は「旅立ち」をテーマに，イラストレーターの遠渡譲氏に描いてもらいました。

Q8 :「発展的な学習内容」は扱っていますか。

A8 :

「発展的な学習内容」は，2 年で 1 箇所，3 年で 3 箇所扱っており，該当箇所に発展のマークをつけています。

＜BOOK 2＞

ページ	記　述
88	「…の〇倍の～」という言い方は次のようになります。 India is nine times as large as Japan.

＜BOOK 3＞

ページ	記　述
72	in a nation where ～ は，where からあとの英語が前の a nation を説明していて，「～であるような国家」という意味になる。
94	the＋比較級～, the ＋比較級… で「～すればするほど，ますます…」という意味になる。
100	the＋形容詞(または分詞)で「…な人々」の意味。

Q9 :　GET 本文の書体と USE Read 本文の書体をどう使い分けていますか。

A9 :

「発話の本文」と「読みの本文」,「文法や表現の導入の本文」と「活用のための本文」という観点で分けてあります。GET 本文ならびに We're Talking 本文（スキット）のように，文法事項の導入と習得の役割があり，書くモデルにもなる本文は，書き文字に近い書体を使い（三省堂オリジナル書体)，読むスキルを育成するためのトレーニング・現実世界で行う読みのリハーサル・シミュレーションの役割をもった USE Read 本文には，メールや手紙，書籍などテキストの性格に合わせ，さまざまな書体に慣れるように複数の書体を使っています。

(2012.4)